

# 島崎藤村・蕨助資料の寄贈に寄せて

加藤 哲郎

手元の記録によると、それは、二〇〇一年一月二八日のことである。「突然、メールいたします。私、島崎蕨助の息子・島崎爽助と申します。二年ほど前、父の残した遺品を整理中に加藤さんからの郵送物を見つけました。…来年の秋頃、群馬県桐生市にあります大川美術館で父の回顧展が予定され、現在父の資料を再構築しているところですよ」。この島崎藤村の孫・爽助氏のメールが、このたび島崎家所蔵の「島崎蕨助コレクション」を寄贈してもらおうきっかけとなった。およそ文学とは無縁の政治学者である私が、その仲介役を果たすことになった。

もともと日本近代文学館には、島崎静子夫人が一九六七年に寄贈した「島崎藤村コレクション」二七九点があり、七八年に展覧会も開催されている。今回のコレクションは、静子夫人のコレクション、信州馬籠・小諸の藤村記念館所蔵資料とはほとんど重ならない。そのいきさつは、右のメールをきっかけに島崎爽助氏と私が編集した共編著『島崎蕨助自伝——父・藤村への抵抗と回帰』（平凡社、二〇〇二年）を参照してほしいが、『夜明け前』執筆から晩年の家族関係、没後の『藤村全集』刊行の事情と深く関わっている。

島崎藤村三男の画家・島崎蕨助（一九〇八—一九二二年、先妻・冬子の子、『嵐』の三郎のモデル）は、親族代表として、戦後長く画筆を絶ち、藤村の文学的遺産の整理・継承に専念した。新潮社版・筑摩書房版『藤村全集』編集に加わり、藤村記念「歷程」賞の選考・運営に携わった。その隠された事情は、二〇〇二年に「描かざる幻の画家 島崎蕨助遺作展」を開いた大川美術館から今回コレクションに移される蕨助の「創作ノート」一六四冊の中に、断片的に記されている。戦後の『藤村全集』編集の際に、静子未亡人の陰に勝本清一郎を見だし、勝本を編集に関与させないために、自分自身が画業を中断して父の遺稿に取り組んだようだ。勝本は『透谷全集』の厳密な校訂で名を残す。

だが勝本清一郎は、もともと島崎藤村に頼まれて、一九二九年に二〇歳の蕨助のペルリン「洋行」に付き添った、当時のプロレタリア文化運動の「同志」のほずである。帰国後も三五年末日本ペン倶楽部創設にあたって、初代会長の藤村を支える主事を勤めた。蕨助の勝本への反発の由来は、ナチス台頭期の在独日本人左翼グループ内の人間関係・党派的対立にあった。

蕨助は、元東大医学部助教授岡崎定洞と演出家千田是也の主導した「反帝グループ」数十人のなかで、千田の率いる新興芸術仲間に加わり、異国の青春を謳歌した。勝本は、同じ芸術家グループでも、藤森成吉と共に、より党派性と規律を重んじる指導者だった。そうした事情を、私は「ワイマール期ペルリンの日本人——洋行知識人の反帝ネットワーク」（岩波書店、二〇〇八年）にまとめたが、『蕨助自伝』はそれを、父・藤村と葛藤した三つの「重い荷物」の

第一として描いている。

島崎蕨助には「父藤村と私たち」（海口書店、一九四七年）、「藤村私記」（河出書房、一九六七年）の著書もある。藤村が「夜明け前」執筆期に抱えた、前妻冬子の子供たちとの距離を知る格好の素材が、『蕨助自伝』および今回の爽助氏寄贈コレクションに数多く含まれている。

コレクションの全貌は、これから本格的に整理され公開されるが、私が爽助氏から託されて瞥見した限りでも、『藤村全集』編集に用いた自筆原稿・書簡類、日本ペンクラブ事務局にもない『NIPPON PEN』創刊号・二号・三号現物など創初期資料、藤村の著作権関係綴り、戸籍謄本、晩年のアルパム・写真、愛用品などがある。神奈川近代文学館「生誕一四〇年記念 島崎藤村展」（二〇一二年）に島崎家から貸し出された資料も入っている。

二〇一三年一月の日本ペンクラブ講演会「島崎藤村と日本ペンクラブの昨日・今日・未来」（『PEN』四二三号）で紹介したが、最近膨大な日本文学からの書簡が見つかった周作人（魯迅の弟）が一九四一年四月に来日した際の、藤村主催歓迎会で写真もある。藤村、周作人と一緒に、『万葉集』『源氏物語』を中国語に翻訳した銭稻孫が写っている。

島崎爽助氏は、広く研究者に利用してもらいたいと、今回の寄贈を決意された。紹介者の私としても、皆さんの活用を期待してやまない。

早稲田大学客員教授、  
一橋大学名誉教授/政治学

## 図書・資料受入れ報告

二〇一五年二月〜四月

▽前号一面で紹介の島崎爽助氏寄贈による島崎藤村・蕨助関係資料は以下のとおり。一六四冊におよぶ蕨助の創作ノート（昭和31〜63）、「絵日記の伝説」原稿（島崎爽助・加藤哲郎編『島崎蕨助自伝』として刊行）ほか草稿・メモなど。新潮社版『島崎藤村全集』資料として、蕨助の編纂見え書ノート（昭和24）、山崎城「最晩年の先生」など全集附録「藤村研究」掲載原稿三点、星野天知「五十年の追憶」原稿、藤村「太陽（自話）」原稿（日光）創刊号掲載）ほか。全集関係を含む書簡は全二二〇通で、うち蕨助宛は有島生馬、石塚友二、伊藤信吉、草野心平、栗木幸次郎、高橋新吉、柳田泉ら一六〇通、藤村宛三通（大正15）を含む蕨助の家族宛一七通。その他、藤村の戸籍謄本、煙管などの遺愛品七点、日本ペン倶楽部会報（『NIPPON PEN』第一〜四号（昭和11〜12）、ペンクラブ関係資料など文書類、藤村六枚、静子夫人関係を含む写真多数。島崎蕨助コレクションとして保存する。

▽上田光生氏から、柳原義光（白蓮の兄）の書軸、カストリ雑誌・俳句誌など一〇〇冊、図書二冊をいただいた。

▽次の方々からそれぞれ著編訳書をいただいた。荻原雄一氏「改訂漱石の初恋」（未知谷）、橋本俊明氏「正岡子規直門 桃澤茂春実曆」（いのり舎）、桃澤匡行氏編「正岡子規直門 桃澤茂春（画名如水）資料」（三）追慕」（桃澤茂春伝研究会）、寺杣雅人氏「志賀

茂春実曆」（いのり舎）、桃澤匡行氏編「正岡子規直門 桃澤茂春（画名如水）資料」（三）追慕」（桃澤茂春伝研究会）、寺杣雅人氏「志賀